「２１世紀、もの溢れる現代から、あらためて飢餓・平和を考える」感想

片岡龍（東北大）

前日に坊沢五義民のフィールドワークに参加しながら、それを翌日のパネルでの安藤昌益と「平和」に関する対話とどうつなげたらよいのか、ずっと悩んでいました。

パネルでは、「平和」とはたんに戦争（直接的暴力）がない状態のことではないというヨハン・ガルトゥングさんの理論や、戦争と対置される語は「日常」であるという中村桂子さんの考えが紹介されました。また、古代の「蝦夷」（＝先住民）侵略・支配以来の東北におけるトラウマ（＝心の傷）をめぐる議論もありました。

「平和」が戦争の反対語になってしまうと、平和は戦争を前提としたもの、言い換えれば戦争と戦争の間に挟まれた一時的、過渡的なものとなってしまいます。また、戦争が損なうものは「日常」であると捉えることで、食糧問題、健康問題、環境問題、そしてそれらの根元にあるイデオロギー（文字）による支配と密接に結びついている事実が見えてきます。

昌益はこのイデオロギー支配の欺瞞を、「不耕貪食」として暴き出しました。そして、「活真互性」「直耕直織」といった創造的概念に満ち溢れた狂おしいばかりの彼の著述行為は、このイデオロギー支配による被抑圧者（北東北人である昌益自身も含む）のトラウマを癒そうとする芸術的表現行為であったとも言えるのではないでしょうか。それは東北の民俗芸能とも、また坊沢の人々の記憶継承とも、どこかでつながっているように思われます。

広島出身であり、東北とりわけ北東北の人々の心性に対する理解の乏しいわたしにも、かつて観た井上ひさしさんの戯曲『父と暮せば』（広島の原爆で多くの肉親、友人が死んでいく中で生き残ってしまった者の自責の念と、それとつきあいながら生きていくことを主題とする）の記憶とともに、こうしたつながりが少し見えはじめてきた、貴重な秋の午後の覚醒体験でした。

最後に、パネリスト・参加者のみなさま、そして何よりもこの行事を企画・運営されたスタッフのみなさまに、心より感謝申し上げます。